

心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして

はじめに

今朝は、聖書の中でもよく知られている箇所を見ていきたいと思います。マルコによる福音書 12 章 28 節から 34 節に記されている箇所です。

この物語は、ある律法学者が近づいて来て、宗教指導者たちとイエスとの間で行われていた議論を耳にしたところから始まります。そしてこの律法学者は、「すべての戒めの中で、どれが最も重要なのですか」と尋ねました（マルコ 12:28）。

それに対してイエスはこう答えられました。

「聞け、イスラエルよ。私たちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。第二の戒めはこれである。自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい。」

今朝は、この律法学者に対するイエスの答えから、三つの黙想（考えさせられること）を皆さんと分かち合いたいと思います。

（第一のポイント）

イエスの答えから私たちが最初に学ぶことは、神との関係についてです。

イエスの答えの最初の部分は、「聞け、イスラエルよ。私たちの神である主は、唯一の主である」という言葉です。私たちはしばしば、神への愛を示すために何かをしようとします。しかし、行動を起こす前に、その行動には土台があることを理解しなければなりません。そしてイエスの答えの最初の部分が、その土台を示しているのです。

（すべての行動には意味を持たせるための土台が必要です。たとえば、ここに親である方々がおられるでしょう。皆さんはとても一生懸命に働き、しばしば自分の限界を超えてまで子どもたちの必要に応えます。なぜでしょうか。その理由は何でしょうか。それはただ、彼らがあなたの子どもだからです。あなたに属する存在だからです。他に理由はありません。「自分の子どもだから」というだけで十分な理由なのです。）

イエスは「聞け、イスラエルよ。私たちの神である主は、唯一の主である」と言われました。この言葉は申命記 6 章 4～5 節から取られています。そこには、「聞け、イスラエルよ。私たちの神である主は唯一の主である。心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」とあります。

申命記6章は、私たちと神との関係を表しています。そしてこの関係は契約の関係です。つまり、人々は神に属し、主はご自分の民の神であられるという関係です。

それゆえ十戒の第一の戒めは、「あなたには、わたしのほかに他の神々があってはならない」と命じています。全能の神こそが、人々が持つべき唯一の神なのです。主はただおひとりです。人々が持つべき神は、このお方だけです。当時、人々は異教の神々を礼拝する人々の中に生きていました。その中で彼らに召されていたのは、ヤハウエなる神だけを自分たちの神とすることでした。主が彼らの人生の第一の位置を占めなければならなかったのです。

今日の私たちにとっても、神の代わりとなり得るものはたくさんあります。たとえば、さまざまな責任があります。家族への責任、仕事への責任、教会への責任、さらにはボランティア活動への責任もあるでしょう。しかし、これらのどれも神の代わりになってはなりません。主こそが私たちの神であり、主は唯一のお方だからです。主は第二でも第三でもありません。

まずキリストが私たちの中心におられるという位置づけが確立されてこそ、イエスの答えの後半が意味を持つようになります。もし神との関係がないままで「神を愛しています」と表現しても、それは単なる義務感に過ぎず、長く続くものではないのです。

(第二のポイント)

次に、主の答えの後半をさらに深く見ていきましょう。

「心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」という部分です。

イエス・キリストを信じる者として、また神に属する者として、私たちに最も重要に求められていることは、主を愛することです。ここで問われているのは、「すべての戒めの中で最も重要なものはどれか」ということでした。そしてイエスは、最も重要なのは神を愛することだと答えられたのです。

愛することは命令であって、選択ではありません。しかもそれは、心を尽くし、いのちを尽くし、思いを尽くし、力を尽くして行われるべき命令です。

愛の反対は、憎しみや嫌悪です。今日の世界を見ると、神を愛するどころか、神に反対する人々がいるのを私たちは目にします。彼らは神の敵となることを選びました。福音を分かち合おうとしても、耳を閉ざし、心を閉ざしてしまうのです。

かつて神を憎んでいた人々の証しを、私たちは読んできました。彼らはクリスチャンをあざけり、神のしもべを苦しめ、意図的に神に逆らっていました。しかしある時、神が彼らの人生に介入され、彼らの心をイエスへと向けさせてくださったのです。そして中には、

牧師、宣教師、献身的な働き人となった人もいます。このような証しは、『ソルト&ライト・マガジン (Salt and Light Magazine) 』にも数えきれないほど掲載されています。

パウロも、ダマスコ途上での回心の経験をする以前は神の敵でした。彼は信者たちを激しく迫害していました。人々が恐れるほど徹底して行っていました。しかし回心の後、自分のしていたことが誤りであったと悟り、ある手紙の中で自分は最も罪深い者の一人だと告白しています。

一方で、神の敵ではない人々もいます。神を知り、神を認めてはいるものの、単に神をなおざりにしてしまっている人たちです。忙しさやさまざまな事のために、主を後回しにしてしまっているのかもしれませんが。神を人生の中で低い優先順位に置き、もはや心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして神を愛してはいないのです。彼らにとっては、仕事のほうが大切かもしれませんが。あるいは人生を楽しむことのほうが重要なのかもしれません。

彼らは神を忘れてしまったのです。祈らなくなりました。聖書を読むこともやめてしまいました。すべての祝福の源が神であることを認めなくなっていました。

また、自分の神への愛はすでに十分高い、あるいは非常に高いと考えている人たちもいます。他の人と比べて、自分はとても霊的に高い状態にあると思ひ、まるで初代教会の教父たちのようだと感じているのです。自分の神への愛に匹敵するものはないと思っているのです。

ところで、聖書には「愛」を表すさまざまな言葉があることをご存じでしょう。この箇所ですべて使われている愛は「アガペー」です。それは愛し、大切にすることを意味し、献身と犠牲の要素を含む愛です。そしてその完全な模範は、イエスにおいて私たちに示された神の愛なのです。

(第三のポイント)

ここで、「心・魂・思い・力」という四つの言葉を、さらに深く見ていきたいと思ひます。

まず第一に、私たちは心を尽くして神を愛するように求められています。

心を尽くして神を愛するとは、私たちの心のすべてを主にささげることの意味します。奉仕するときには、心から、全身全霊で仕えるべきです。私たちは主に完全に献身するように求められているのです。神を完全に愛するとは、時間の100%をもって主に献げることです。時々だけでなく、気が向いたときだけでもありません。ましてや、困ったときだけ神を求め、神を愛するということであってはならないのです。

私たちがいくつかの日曜日に歌う賛美歌があります。その題名は「われはすべてを主にささぐ (I Surrender All) 」です。ここで注目したいのは、「すべてを」ささげるのであって、「一部」でも「ほとんど」でもなく、「すべて」であるということです。

詩編 27 編 4 節にはこうあります。

「一つのことを私は主に願い、それを求める。私のいのちの日の限り、主の家に住み、主の麗しさを仰ぎ見、その宮で思いを巡らすことを。」

詩篇の作者の願いは、主を求め続けることでした。ほんのひとつきではなく、生涯を通して主の家に住み、主の美しさを見つめ続けることです。聖書は、真実な心をもって主のもとに来るよう、私たちを招いています。

第二に、私たちは魂を尽くして神を愛するよう求められています。

神が人を創造されたとき、その鼻にいのちの息を吹き込まれ、人は生きる者となりました。つまり、魂を尽くして神を愛するとは、私たちの人生そのものをもって神を愛することです。

私たちは、シンガポールでは毎週自由に教会に集まり、神を礼拝できることを感謝します。信仰のゆえに身体的な迫害を受けることはありません。しかし、アジアの一部や世界のある地域では、クリスチャンであることは決して容易ではありません。クリスチャンであるということは、命を失うことや、拘束されることを覚悟しなければならない場合もあるのです。

教会の歴史を読むと、18 世紀の日本では、クリスチャンが激しい迫害を受けたことが分かります。多くの人々が、イエス・キリストへの信仰のために命を落としました。

もしある日、キリストを選ぶか、それとも自分の命を守るかという選択を迫られたなら、私たちはどちらを選ぶでしょうか。私たちはイエスのために命を差し出す覚悟があるでしょうか。

イエスは、神から与えられた使命を果たすために、ご自分の命をささげる用意がありました。人の子は仕えられるためではなく、仕えるために来たと語られました。私たちは同じようにできるでしょうか。

聖書そのものに詳しく書かれているわけではありませんが、伝承によれば、多くの最初の弟子たちは悲慘な最期を遂げました。

ペテロはローマで逆さ十字にかけられ、ヤコブは斬首されました。宣教師としてインドへ行ったと考えられているトマスは槍で突き殺され、マドラスに葬られました。ヨハネだけが老衰で亡くなったようですが、彼も皇帝によってパトモス島に流されました。

私たちは信仰のために血を流すことはないかもしれませんが、自分のいのちを差し出す覚悟があることを示す方法はあるでしょうか。故郷のある教会では献血活動が行われています。

私は、献血は現代において自分のいのちを差し出す一つの方法だと思います。それは他者への奉仕であり、最も必要としている人に命を与える贈り物です。そして、私たちは誰を

助けているのか分からないかもしれませんが、その人が私たちに報いることもありません。私たちは、イエスのためにいのちを差し出す覚悟があるでしょうか。

第三に、私たちは思いを尽くして神を愛するよう求められています。理解のすべてをもって神を愛するということです。その理解は、神の御言葉で心を満たすことから生まれます。

詩編 1 編 2 節にはこうあります。

「主のおきてを喜びとし、そのおきてを昼も夜も口ずさむ。」

この詩人は、目覚めているあらゆる時間に神の律法を思い巡らしています。何で心を満たしているかがよく分かります。

以前、私はフルタイムの働き人のためのリトリートに参加しました。その日の分かち合いは、祈り、聖書を読むこと、断食などの霊的訓練についてでした。そこで進行役が参加者に、趣味や好きなことを分かち合うように求めました。（隣の人と、何をするのが好きか分かち合ってみてください、というように。）

ある人は音楽を聴くことが好きだと言い、別の人は編み物が好きだと言いました。男性の方で編み物をする人もいました。ジムに通うという人もいました、体格が良いので分かります。また、スーパーを歩き回って新商品を見るのが好きだという人もいました。

しかし、聖書を読むことが好きだと言った人は一人もいませんでした。しかもそこにいたのは皆フルタイムの働き人、つまり神に仕えている人たちだったのです。

思いを尽くして神を愛するとは、自分の心を何で満たしているかを意識することでもあります。ローマ 12 章 2 節はとても助けになります。「この世の型に従ってはなりません。むしろ心を新たにすることで自分を変えていただきなさい。」

ですから、主の御言葉と真理で私たちの思いを満たしてくださるよう、いつも祈る必要があります。また、神のことを理解できるように、心を開いてくださるよう祈らなければなりません。神の御心と目的を理解するためです。神を愛するとは、神の御心に従うことによって表されるのです。

第四に、私たちは力を尽くして神を愛するよう求められています。

単に「主よ、あなたを愛します」と言葉で言うだけでは十分ではありません。行動が伴わなければなりません。行いや働きによって示すのです。そして行動には力が必要です。ヤコブの手紙 2 章 14 節は「行いのない信仰は死んでいる」と語っています。

積極的に主に仕えている方なら、神の働きが実際には大変な労力を要することをご存じでしょう。会議に出席し、準備等を整えなければなりません。

私がクムヤン MC の牧師になる前のことです。そこはショートストリート・タミル MC の近くにありました。彼らは寮に住む移民労働者へのアウトリーチ・プログラムを行っていて、私は教会のバンを運転して人々を教会まで送り迎えするのを手伝っていました。プログラ

ムの後には、また寮まで送り届けます。寮はウッドランズやトゥアスにあり、とても遠かったのです。私が戻るころには、もう真夜中を過ぎていました。そしてたいていそれはイースターやクリスマスの時期でした。ですから、そうした祝日はすべてその働きのために費やされていました。

しかし、神に仕えるには体力が必要です。宣教や福音伝道の働きは大変な労働です。多くの力を必要とするのです。

それでもなお、聖書的な結婚と家族の理解を守り、堅く立ち続けている人々もいます。そしてこの人々は、信仰を守り、このような問題について聖書が語っていることを堅持する務めへと神に召されているのだと信じています。

しかしその働きの中で、彼らは嘲られ、攻撃され、排除されます。中傷的なコメントを書かれ、侮辱されます。それでも立ち続けるには、大きな力が必要です。神を愛するには、多くの力が求められるのです。

ゲツセマネの園で、イエスが祈りに時を費やされたことを思い出してください。聖書には、「イエスはさらに熱心に祈られ、その汗が血のしずくのように地に落ちたと記されています」（ルカ 22:44）。

結論

最後に、一つの結論をもって締めくくりたいと思います。これは 34 節に記されています。「イエスは彼が賢く答えたのを見て、『あなたは神の国から遠くない』と言われた。」

マルコの福音書の流れから見ると、この物語は良い結末を迎えています。イエスは、この律法学者が神の国に非常に近いところにいると認められました。

そこで皆さんにお尋ねします。

あなたは神の国から遠く離れていますか。それとも、神の国から遠くないところにいるでしょうか。

聖書を読むと、イエスから遠く離れてしまった人々がいることが分かります。アダムが神に罪を犯したとき、彼は神から逃げました。しかし、彼らを探しに来て、「アダムよ、あなたはどこにいるのか」と呼びかけたのは神のほうでした。

迷い出た羊のたとえでは、羊は群れから離れてしまい、もし救い出されなければ、羊飼いかからますます遠くへ行ってしまう。

放蕩息子のたとえでは、息子は望んだものを受け取ると、遠い国へ旅立ちました。それは父からますます離れていく旅でした。

私たちの誰もが、かつて主を愛していた人を知っているのではないのでしょうか。かつては大きな献身をもって主に仕えていたのに、今はそうではない人々を。彼らは主からだんだ

ん遠ざかってしまったのです。

ですから、今朝、私たちすべてに与えられている招きは、イエスのもとに近づくことです。ヤコブ4章8節にはこうあります。

「神に近づきなさい。そうすれば、神もあなたがたに近づいてくださいます。」

では、どのようにして神に近づくのでしょうか。

それは、心を尽くし、いのちを尽くし、思いを尽くし、力を尽くして神を愛すること、そして自分自身のように隣人を愛することによってです。

その応答として、しばらく静かに思い巡らしてみましよう。

黙想のための問い

1. 心・魂（いのち）・思い・力を尽くして神を愛していることを、実際の生活の中でどのように表すことができるでしょうか。
2. 私たちが神に近づくことを妨げているものは何でしょうか。